「死者を死せりと思うこと勿れ」

第１１組　廣専寺　近藤　龍麿

普段から、アニメ・漫画などあまり見ないのですが、以前から気になっていた「新海誠監督」のアニメで、『すずめの戸締り』が大流行しています。その監督の前作『天気の子』でもその前の作品『君の名は』にも通底している響きが（死者を死せりと思うこと勿れ)、近年久々にビクッとした言葉に出会ったような思いを抱かしてくれたように記憶しています。

死者のその身体は、お骨となってお墓に入ったり、納骨堂に安置してあったりと様々ですが、死者達はその人生折々に、笑顔であったり・激励の言葉であったり様々な表情・表現となって一緒に生きて下さっていると、６４歳でなくなった兄や実家の父・先生・同級生・後輩達、また多くの御門徒の人たちが私の上に生きて下さっています。

今年１月１７日、闘病中の後輩が、この世を去っていきました。病気になっても、学ぶ事への探求心は衰えを知らず、最後まで真宗に拘り・親鸞様に拘り続けた姿を私は生涯、忘れることはないと、深く。胸に刻み込んで、今日を生きています。彼の晩年よく語っていた言葉に

「近藤さん、僕たちは死ぬんじゃないんだよ、生まれていくんだよ。」

と言っていた言葉です。我々の真宗の教えでは、念仏往生ですから、その通りと思ってはいましたが、言い切っている彼の小気味よさに、新鮮な驚きと清々しさを覚えていました。

彼の通夜・葬儀には、関東での仕事があり参列出来なかったのですが、亡く

なったという知らせを受けて、すぐお悔やみに行きました。生ききったという彼の姿、その表情に両手を合わせて合掌をし、随分長らく仏教青年会や研修会・学習会で一緒に学んできましたので、思わず

「楽しかったな」

と念仏と共にこの言葉が口をついて出てきていました。

　家族の方と一緒に、仏間の方へ遺骸を移動させ、僕自身、安堵したのか、一条（すじ）の涙が流れ落ちていました。九州から岐阜にきて４０年、会いがたき人たちに会うことができ、そして別れ、今なお出会い続けていける教えと環境を頂いたことに、一乗の世界を表現し続けた親鸞様の真宗で良かったと、そう言い切れる自分にもさせてもらったと思える今日があります。私の兄も・父も多くのお見送りした方々も、皆、南無阿弥陀仏になって永遠を生きて往くんだと、そこに親鸞様も蓮如様も生きていらっしゃるということを、机の上でなく人生の歩みの中で報された出会いの尊さを思うことです。